

Title	『みだれ髪』と『或る女』に読む「衣」
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52837
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『みだれ髪』と『或る女』に読む「衣」

羽生 清／京都造形芸術大学

明治維新以後、西欧の目を意識して飾る行為は男性を意識して装う女性に似ていた。英語で学びアメリカへ留学し、近代化を求め続けてきた日本の綻びがそのまま自身の苦悩だった有島武郎。対して、『明星』を飾ったアール・ヌーヴォー風の裸体が語り出した趣で、衣服に隠されていた感情を高らかに歌いあげた与謝野晶子。20世紀最初の年、明治34年に出た『みだれ髪』で晶子は、衣に託して想いを詠う。「湯あがりをお風めすなのわが上衣 舐んじむらさき人うつくしき」「神の背にひろきながめをねがはずや今かたかたの袖ぞむらさき」歌に登場する色は紫、形は袖に集中する。着物は不思議な形をしている。一見、無駄に見える袖に過剰な意味が込められ、そこに魂が宿る。

『みだれ髪』の感想を、明治36年4月8日の日記『観想録』に書いた有島は、この年、アメリカへ留学した。キリスト教的な教えが偽善に映りはじめていた有島に、肉と霊とが一つになった『みだれ髪』は生き方を変えるほどの衝撃を与えた。『みだれ髪』を読んだ有島は晶子を思想家と呼ぶ。晶子の思想は専門的研究の参考書であり、その研究成果が『或る女』である。有島は、葉子に『みだれ髪』の情熱を注ぎ込んだ。この小説は『みだれ髪』出版の年、20世紀最初の年に始まり翌年、終わる。結婚のためアメリカに渡る船上で恋に落ち日本に戻ったヒロイン葉子が、まず目にした新聞紙上の記事に晶子の名が登場する。「二面には富口という文学博士が『最近日本に於ける所謂夫人の覚醒』と云う続き物の論文を載せていた。福田と云う女の社会

主義者の事や、歌人として知られた与謝野晶子女史の事などの名が現れているのを葉子は注意した。」晶子が話題になっている同じ新聞に葉子自身がスキャンダルの主人公になっていた。歌人として華やかに活躍する晶子。才気を愛欲の奈落へ注ぎ世間の非難を一身に浴びる葉子。帰国後、妹たちと生活した葉子は、崇拜者たちの心が妹へと移ってゆくことに平静を失う。その転機にも有島は、『みだれ髪』を小道具に使う。「『何？ 読んでいらしたのは』と云って、そこにある四六細型の美しい表装の書物を取り上げて見た。黒髪を乱した妖艶な女の顔、矢で貫かれた心臓、その心臓からぼたぼた落ちる血の滴りが自ら字になったように図案された『乱れ髪』という標題——文字に親しむ事の大嫌いな葉子も噂さで聞いていた有名な鳳晶子の詩集だった。」衣裳を愛し着ることに人生を賭けた葉子。着る喜びを断念し文字に親しんだ晶子。晶子は情熱を衣に託して歌に詠んだ。有島は衣装をモチーフに女の裡側に入り込み自己を凝視した。有島の強い願望が込められていた葉子は唯美的な生き方を求める。「葉子は心の奥底でひそかに芸者を羨みもした。日本で女が女らしく生きてゐるのは芸者だけではないかとさへ思つた」また、葉子は次のように描写されている。「思ひ存分の金を懐に入れて買物をする位興の多いものは葉子に取つては他になかつた。越後屋を出る時には、感興と昂奮とに自分を傷めちぎつた藝術家のやうにへとへとに疲れ切つてゐた。」芸者とは男を意識して生きる女である。異性を意識しない女の装いは、ただ金目なものを身につけて醜くなっ

て行く。葉子は自分を盗み見る貴婦人たちに対して「お前達の、その物乞いしながらも金目をかけた派手作りな衣裳や化粧品は、社会上の地位に恥じないだけの作りなのか、良人の目に快く見えよう為なのか。そればかりなのか。お前達を見る路傍の男達の眼は勘定に入れてゐないのか。……臆病卑怯な偽善者共め！」有島は、欧米に対する劣等感を女性を通して払拭しようとするかのようにアメリカへ渡ろうとする葉子を「和服よりも遙かに洋服に適した葉子は、その交際社会でも風俗では米国人を笑わせない事が出来る」と書く。

洋服を身につける技を通して、欧米と互角に渡り合おうとする葉子。葉子の努力は、西欧に憧れ、いつも西欧を意識しながら、自分自身の内面の深さを磨ききれない、あるいは自覚的に語りえなかった日本に似ている。和服よりも洋服の似合う葉子は、いち早く儒教的な女徳を脱ぎ捨てていた。葉子は激しく世間を憎みながら、葉子の幸せはいつも世間からしか与えられない。初めて、葉子が納得できた男性とアダムとイヴのように出会う。しかし、船から降りて舞台が家庭になると、たちまち葉子は精彩を欠く。良妻賢母というイデオロギーが足枷となって葉子を苦しめる。男と平等であろうと足掻けば足掻くほど孤立し死の床につく。葉子は、その激しいエネルギーを自己破壊へと向けてゆく。晶子は身のうちの情念を言語に表現した。だから、葉子にとって最大の恐れであった老いも、晶子には歌の円熟、批評の深みとなっていった。

葉子は、男が内面を投影した宿命の女である。葉子は有島武郎であった。大正5年、亡くなった妻が崇拜した晶子に妻の歌集を贈り、三人の遺児さらに長男としての家の重荷を背負いつづけた有島は、西洋的なものと日本のなものに挟まれて大正12年、軽井沢の別荘で婦人記者波多野秋子と共に死ぬ。寛との生

活に傷つきながら女性の生き方について考えた晶子は、古典的な教養のうえに、ヨーロッパで得た知見を加えて、評論活動を展開した。「一體に、一見して人目を惹くやうな派手作りは田舎丸出しの無知な趣味でなければ賣笑婦の趣味であると思ひます。巴里あたりでも心ある婦人は皆人目に付かないやうな質素な好みの中によく氣を付けて見ると何處かに新しい派手な所を加味して單調を破つて居ると云ふ風です。」米国へ行っても、服の着方では米国人に負けない葉子は、巴里の心ある女性のように派手好みであってもけばけばしくはなく、時と場所をわきまえて自分の魅力を十二分に発揮する人であったにちがいない。葉子は着ることを一つの芸術と考えていた。そのような態度は家庭婦人のそれとは違う。賣笑婦の趣味として卑しむと書いた晶子は、しかし差別的な発言をしているわけではない。「却てけばけばしく無い、垢抜きのした、奥ゆかしい、氣の利いた衣服の好みを発見するのは、彼等（賣笑婦）の中の或階級の人達に多いのです。それは其筈で、彼等は寝ても起きても自分の容姿を修飾することに専念して居る一種の美術家であるからです。」同性を意識して装うときには金目なもので位取りを考えるが、異性を意識するときは本能的な力が工夫を凝らし、垢抜けたものになると考えた晶子同様、葉子は芸者だけが女らしく生きることができると感じ、一種の芸術家として世間に挑もうとした。

大正6年に晶子が書いた評論と大正8年に刊行された『或る女』のこの符帳は偶然ではない。評論が専門家の仕事になっていたとき、晶子は政治、芸術、風俗、ファッションまでを生活者の立場から、詩的感性を発揮して自在に語った。